



鳶谷住職(右)と遠藤リポーター

ると小雨に濡れ、どっしりと枝葉を広げる姿は、数多い古木の中でもひとときわ迫力があります。

管理をしている中村千知子さんの案内でお庭を拝見しましたが、その敷地の広さと「五稜池」を中心とする回遊式庭園の本格的な造りにまず驚きました。池に施された州浜の手法や飛び石、石灯ろうの特徴などの説明を受けながら、京風のお庭をゆっくりと一周しました。

内路地から入って五稜池を巡り待合でお庭の眺めを楽しみながら待つことしばし、季節の木々の彩りや木漏れ日、池から巡り流れる水音などに心を遊ばせ、やがて茶室に案内される。そこでいただく一服の茶と、閑雅な話題でゆったりと過ぎてゆく時間…。お客様を



雨に香る宗福寺庭園

迎え、茶室でもてなすための配慮が行き届いたお庭だと思いました。茶道をたしなむかたにとって、このようなお庭はあこがれであろうと思います。当時ここに招かれたお客様がお庭を散策する様子などが目に浮かんでくるような気がしました。

お庭の一角にある井戸から水が引かれていた五稜池には、大きなニシキゴイが悠然と泳ぎ、又、あちこちに配置された鞍馬石は、地上に姿を現している一枚石の平面の大きさと、さらにその地下に3分の2もの部分が埋まっているという巨大さに驚かされます。このような大きな石を京都から何個も運んだ鳥潟家の当時の権勢や財力がしのばれました。

待合の建物を支えるかのように



鳥潟会館で中村さん(右)から説明を受けました

立つ大木の「ユリノキ」。北アメリカ原産のモクレン科の、この辺りでは珍しい木なのだそうです。

この木の葉は着物のはんてんの形に似ているので「ハンテンボク」とも呼ばれているとのこと、6月初旬から中旬の頃、中心部がオレンジ色の帯黄緑色の花が咲き、少し離れた場所や上の位置から眺めると、とても美しく見事であるとのことでした。是非その時期にまた訪れて花を見たいものだと思います。この見事なお庭とお屋敷が市民に無料で公開されているというのも驚きで、大変幸せなことだと思います。

毎年7月の最終日曜日には「街の茶会」が開かれます。さぞかし優雅であろうとその日のたたずまいを想像して鳥潟会館を後にしま



京風のお庭「鳥潟会館庭園」

した。

枯山水の風雅 高橋家庭園

高橋家は江戸時代から十数代続く旧家であり、代々、地域の指導的役割を果たし、また優れた人材を輩出した名家としても知られています。

庭に面して開け放たれた母屋の座敷は、土間廊下と並行して広縁がぐるりと巡らされた大変珍しい造りでした。土間廊下を残すお宅が、今も大切に生かされていることに感激しました。

ここのお庭は江戸時代後期、およそ200年前に創設された石州流の枯山水のお庭であるとのこと。趣ある庭門をくぐり、置き石伝いに足を運ぶと、正面の視界を斜めに横切る大きな松の木が目